

# 世界の中の日本



text by 丹 大輔 + photographs by Yocco

## 日本の声を国際社会に

私はハワイ大学を卒業後に帰国し、ジャーナリズムの世界に入りました。私は当初、ジャーナリズムについて知っているわけでも、特に好きでもありませんでしたが、知人の紹介でご縁をいただき、アメリカの新聞社の東京支局でアシスタントに就くことになりました。働きながら、私は「アメリカ人が書く記事はアメリカの価値観に基づいて書かれている」という事に気付きました。当時、上司のアメリカ人支局長が書く記事は素晴らしいものでした。しかし、それは飽くまでもアメリカの価値観を軸に書かれた記事でした。日本の見方や価値観が十分に伝えられていたかといえば、必ずしもそうではない場合もありました。ただ、これが国際報道の実態でもあります。

このことは外交にも通じます。外交はそれぞれの国の代表が国益のために主張をぶつけ合う武器無き戦いの場です。他国の主張を額面通りに受け止めてはいけません。ひとつの国のひとつの新聞記事だけしか読まなければ往々にして誤解が生まれるように、外交で他国の主張を留保なしで受け

止めれば誤解が生まれてしまうのです。では、日本は自分の考え方を世界に知らせるのに、どれほどの発信力を持っているのか。日本語の記事は日本人しか読まず、海外の人は読みません。一方、欧米の人々の発信である英語の記事は全世界の人が読みます。当然、日本にとって状況は不利です。そうした思いもあって、私は「日本の声を国際社会に届けたい」と考え、アシスタントを三年半経験した後、記者になりました。七、八年に渡って「日本人の視た国際問題」という視点で英語の記事を書き、発表してきました。

## 全うな振る舞いをされる国づくりを

一八五三年、黒船四隻で来航したアメリカのペリーが日本に開国を迫りました。ペリーは「日本人は我々とは異なる、ゆえに劣等民族だ。通常の外交ではなく、武力による外交をすべきだ」という考えのもとに日本を開港させました。日本人を武力で抑え、あわよくば日本を植民地にしようと考えていました。その後来日した初代総領事タウンゼンド・ハリスや通訳のヘンリー・ヒュースケンは、日本に滞在し、日本が素晴らしい文明を築

いている事に気付きます。当時の日本人が身分の上下に関わらず幸せそうな顔をしているのを見て「西洋の価値観を持ち込むことが必ずしも日本国民の幸せにはならない」という事を理解していきます。日本をとり巻く、アメリカとヨーロッパ諸国のせめぎ合いは厳しく、アメリカは結果として日本の近代化を助けました。

このように歴史を振り返るとアメリカは「酷い国」にも「素晴らしい国」にもなり得ます。例えば「日本に対して武力で外交を迫った国」や「原爆を落とした国」という観点に立つとアメリカは「酷い国」です。一方で、「日本の近代化に力を貸した国」という観点に立つと別のイメージになります。今後、日本にとってアメリカが友好的な国であり続けるためには、私たちの努力も必要です。アメリカから全うな振る舞いをされるような国をつくっていかねばなりません。そのため日本が今やらなければならない事は、「日本は気概を持っている国だ」という姿を見せていく事です。アメリカとの同盟関係に一方的に頼るのではなく、必ずいつか完全に自立した国家になるという気概です。この姿勢を見せる事が重要です。

## 歴史を学び、正しい方向へ進む

江戸幕府が政権を天皇に返上し、大政奉還を行った時、日本には欧米各国に対抗できる知識も軍隊もありませんでした。富や技術を比較しても明治の日本は、今の日本よりも当然劣っていました。それでも立派な明治時代を築きました。明治の政

治家や、社会の中心にいた人たちは、当時の日本に力が無い事を理解していました。ですから、欧米と治外法権を含めた数々の不平等条約を結ばざるを得なかったのです。それでも「いつの日か不平等条約を撤廃し、絶対に立派に独立を取り戻す」という想いを持ち続け、不平等条約に耐えながら植民地にされないように気をつけていたのです。臥薪嘗胆の想いで努力し、「富国強兵」のスローガンのもとに国の経済を活性化させ、強い兵を蓄え、軍事力と経済力を発展させていきました。明治の政治家は「国家」というのは外交力と軍事力を身につけていなければまともな国家ではあり得ない」という事を認識していたのです。

歴史を振り返れば日本の素晴らしさが見えてきます。しかし、戦後の日本は日本の素晴らしさを目をつぶって、ひたすら日本を否定してきました。物事の一面だけを見ると物事の見方が偏ってしまいます。物事の見方が偏った状態で正しい答えを導き出せるはずがありません。今の日本は「間違った答え」を「正しい答え」だと信じていて、その結果、誤った方向に進んでいると危惧しています。皆さんは五年後、十年後に社会の中堅のポジションに付き、二十年後には社会を担っていく立場になります。だからこそ、歴史を学んで、日本国の成り立ちをよく理解し、近代の歴史で日本がいかに立派な働きをしたかを知った上で勇気を奮い、周辺の他国に侮られないような国づくりをしていただきたいと思えます。積極的に発言し、皆さんが日本をより良い国家へと変えていく中心の力になっていただける事を期待しています。

物事の一側面だけを見ると物事の見方が偏ってしまいます。  
物事の見方が偏った状態で正しい答えを導き出せるはずがありません。



櫻井 よしこ Yoshiko Sakurai  
(国家基本問題研究所理事長)

ベトナム生まれ。ハワイ大学歴史学部卒業。クリスチャンサイエンスモニター東京支局、アジア新聞財団『DEPTH NEWS』記者、東京支局長を経て、1980年5月より日本テレビの『NNNきょうの出来事』のメインキャスターを16年間務める。ジャーナリストとして多方面にて活躍。1995年度第26回大宅壮一ノンフィクション賞、1998年度第46回菊池寛賞受賞。2007年国家基本問題研究所の初代理事長に就任。



### 櫻井先生の近著

『櫻井よしこの憂国—論戦2009』

¥ 1,500 ダイアモンド社 2009年

誇りを失い、脆弱になり果てた日本よ。いまこそ覚悟を示し、まっつき自立国家となれ。沈みゆく日本の活路を開く最新時論集。